

南太平洋に桜散る―  
幻の叔父・山岸昌司を追って

続編 I

乙飛六期 故 山岸昌司 様  
姪 平林 峰子

『バスに乗り、青葉城址を見学する。

かつては伊達六十二萬石余の居城なり。今は唯その面影を一部の婁屋城壁に残すのみ。(中略)此処は、我が友、高橋君の生地なり。花々しくも成都の空に散った君の霊地。今この地において安らげると祈る。君の墓前にぬかずき我前より願う処なり。されど我、今君を語る自由な時間なきために悲し・・・。』

(故山岸昌司 昭和十六年五月八日 日記より)

【高橋さんは昭和十四年十一月十四日中国成都攻撃中空戦で戦死されています。】

この日記に書かれていた「今君を語る自由な時間なきために悲し」の言葉が私の心に残り、忘れることはありませんでした。

いつか必ず叔父に代わり仙台に行き高橋金六さんのお墓参りをしたいと思いついて早七年の歳月が流れていました。

仙台には二百近いお寺が存在しています。そのどこかに高橋金六さんが

眠っているはずですが、お寺に問い合わせても個人情報保護のために何も教えてはいただけません。途方に暮れていた私に突然さした光明は、四年程前の予科練戦没者慰霊祭でまたまた仙台市在住の猪股恒一さんにお会いできたことでした。猪股さんは私の叔父と予科練が同期(乙飛六期)の佐々木孝さんの甥御さんです。

私はご迷惑も顧みず、猪股さんに窮状を相談してみました。すると猪股さんは快く高橋さんのお墓の搜索を引き受けてくださいました。今年の春ごろから捜していた頂き、やっと私の望みが叶う日がきたのです。

平成三十年十月十七日 私は 信濃大町駅発午前五時三十分の電車で東京へと向かいました。東京駅で新幹線に乗り換え一路仙台を目指しました。

午前十一時三十九分、仙台駅に着くと、そこには猪股さんと山形県在住のNさんが待っていてくれました。Nさんは三年前の筑波海軍航空隊の慰霊祭の折、偶然叔父の資料が展示されている部屋でお会いした女性です。

当時Nさんは、山形県出身の安部晃さんの事を調べておられ、同じ日に戦死した叔父山岸昌司の事を少しでも知りたいと調べていたそうです。

そんなご縁もありおつきあいが始まりました。

何度か長野県大田市にある叔父のお墓にお参りに来て下さり、今ではかけがいのない友人の一人となつています。

仙台駅で昼食を済ませ高橋金六さんが眠るお寺に向かいました。お寺は近くに、広瀬川が穏やかな川面を見せる仙台市内の閑静な場所にひっそりと佇んでいました。

「やっと来れました!」私は墓前に花束を手向け、そして静かに手を合わせました。

私が知らない激動の時代を駆け抜けた高橋さんと叔父がそつと何かを話し合っていたような、そして高橋さんがやさしく微笑んでくれていたようなふとそんな気がする静かな時間が過ぎていきました。

そんな静寂を破るように猪股さんが話されました。

「何日かこのお寺を訪ねてようやくたりついたのがここでした。お寺の中を隈なく一基一基さがして、やっと高橋さんのお墓の場所が分かりました。」



私はしばらく言葉が出ませんでした。そしてなぜか涙があふれてきました。

残念ながらもまだ、岩手県内に眠る猪股さんの叔父様のお墓参りには行け

ていませんが、来年はきつとお参りさせていたただきたいと思っています。

「来年の予科練戦没者慰霊祭で、またお会いしましょう。」とお礼を述べたお寺にお別れし、Nさんの車で私のもう一つの目的地でもある山形県に向かいました。

二時間程で着いた所は、Nさんが時々一人で来るといふ安部晃さんが眠る墓地でした。

墓前に花束を手向け手を合わせる。と、なんだか懐かしい気がしました。やがてあたりが暗くなり始めてきたので、今日の宿であるかみのやま温泉に急ぐことにしました。

翌日は、山形県で行われる戦没者慰霊祭に出席する予定です。以前Nさんからお聞きし、どうしても出席したいと思っていた慰霊祭です。

叔父と同じ飛行機で戦死された、児玉清三さん(甲飛三期 横須賀海軍航空隊出身 幾多の海戦に参加、南太平洋にて散華)がここ山形県のご出身だったからです。

翌十八日朝、Nさんがホテル玄関まで車で迎えに来てくれました。私は、叔父の飛行機に搭乗して同時に戦死された児玉清三さん、村上守司さん(乙飛九期 長野県岡谷市出身)の三人と一緒に撮影された写真をバックに忍ばせてホテルを出発しました。

会場に着くとすでに大勢の人が来られており、やがて十時になりおごそかに式典が始まりました。

私はバックからそつと三人の写真を出し白い菊の花が飾られた祭壇に向け「よかったね！ようやく三人一緒になれたね！」と心の中でつぶやきました。

『操縦員山岸昌司、偵察員児玉清三、電信員村上守司の三人は九七式艦上攻撃機に乗り組み、敵航空母艦攻撃の任務を受け、昭和十七年十月二十六日 母艦「翔鶴」を飛び立ち南太平洋において空母攻撃中に被弾し、敵艦船に体当たりして自爆し戦死いたしました。』



二時間程で式典が終わり、爽やかな気持ちで私はかみのやま駅を後にして東京に向かいました。

七年前、私の前に突然現れた叔父の山岸昌司。

そして叔父が残した数々の遺品の中にあつた几帳面に日々の出来事や思いがこぼれた日記帳。

そしてそこに記されていた叔父の戦友たちのこと。

私は叔父と一緒に天国に旅立った三人の戦友の事をしらべ、そのお墓に手を合わせる事ができた今、長年続けてきた叔父の足跡を辿る旅に終止符を打つことができるような気がします。

人は皆人生を終えるときに、自分の生きざまを誰かに伝えて去っていくものだと思つていますが、きっと叔父は戦後七十年を過ぎて私にその思いを伝えてくれたのではないのでしょうか。

叔父がどんな思いで予科練を志願し、どんな思いで厳しい予科練の訓練に耐え、どんな思いで友部の永井さんご家族と交わり、どんな思いで敵艦に突入して行つたのか。

これからは、この七年間で私が経験をしてきた様々な奇蹟のような出来事を次世代の若い人々に伝えるための活動を継続していきたいと思つております。

叔父がその命に代えても護りたかつたこの国の平和と、故郷の山川そして家族を護り続けるために。

(今夜は、叔父と児玉さんと村上さんの三人でにぎやかなお酒を酌み交わしていることでしょうか！)